

## バックストンの流れを汲む聖化について

工藤 弘雄

バックストンについての認識は、最近とみに深まりつつある。それは彼の生活の最後とその信仰（ヘブル二三・七）が、今日のキリスト教会の求める最も深いニードに合致し、今なお非常に新鮮さをもっているからである。今日、バックストンに直接師事した「弟子たち」の数はきわめて少なくなった。しかし、その残された言動を通して私たちは十分に彼に近づくことができる。ちなみに、彼の著書はその著わされた時代からみて、三つに大別される。第一は「赤山時代」で、文字通り明治二十四年から三十五年までの「松江バンド」形成期に著わされたもので、『赤山講話』、『ヨハネ伝講義』、『レビ記講義』、『創造と墮落』の一群であって、赤山塾での聖書研究や修養会の説教がまとめられている。第二は、「神戸時代」で、神戸を中心に「日本伝道隊」の働きが拡大した時期のもので、『使徒行伝講義』、『詩篇の靈的思想』、『ルツ記靈解』、『雅歌靈解』、『ヨナ書靈解』、『リバイバルの要件』などである。第三群は、英国スウオニック聖会での説教と、昭和十二年、最後の来日の時の説教を中心にまとめたもので、その働きは超教派的に全国的に拡大され、またいくつかの独立した群も起され、それらのものがみな一つにされた靈の集団に対して語られたメッセージである。『雪の如く白く』、『基督の形成るまで』、『恩寵の成長』、『沙漠の大河』、『エホバの栄光』、『神の奥義

なるキリスト』、『聖潔られたる者の行歩』などの一群である。なおこのほかに、『神と偕なる行歩』やその他の小冊子、いくつかの聖書講義ノートなどがある。

これらの書物に著わされた彼の「信仰」が歴史的に見てどのような働きをなし、どのような結果をみたか、そしてその「信仰」の實質は何であったかを見極めることは、今日の我らの福音主義陣営にあって極めて重要な意義をもつものと思う。

## 一

バックストンの来日した一八九〇年、明治二十三年という年は、日本のキリスト教史に重大な意義をもつ年であった。明治キリスト教の一区分をこの二十三年とするものと、二十二年とするものとまちまちであるが、日本のキリスト教会にとって、「大日本帝国憲法」にうたわれる「信教の自由」のもつ歴史的意義よりも、国家権力の下における倫理規範の強制をあらわす「教育勅語」のもつ歴史的意義の方がはるかに大きいものと思われる。それはともかくとして、やがてそれらが二重の鉄の壁となって、外側から日本のキリスト教会に圧力を加えるに至った。それらの国家主義の力の前に、それまでの急成長のキリスト教はあえなく敗退した。ちょうど時を同じくして、明治二十二、三年ごろ、発展途上にあつた日本のキリスト教会に内部から痛烈な打撃を加えた勢力が「ドイツ福音普及教会」及び「米國ユニテリアン思想」に代表される「新神学」であつたことは、もはや論をまたない。「新神学」ないしは「自由主義神学」の、とりわけ聖書信仰への高等批評学的ゆさぶりは、想像を絶する破壊力を秘めていた。「新神学」のいわゆる緻密にして徹底した歴史批評学的な聖書研究はそれなりの評価を得たにしても、聖書無謬説と純粹な贖罪信仰

に立ってきた日本のキリスト教会に与えた影響は極めて深刻で、何らかの形をとって今日まで尾を引くに至った。さらに明治二十三年という年は、明治十九年「全国基督教信徒親睦大会」の流れを汲んで発足した「福音同盟会」以来試みられてきた「日本基督一致教会」と「日本組合基督教教会」の合同運動が流産した年であつた。これは、超教派協力事業に見られる「集中化」を教派形成、すなわち「分派化」の傾向に決定的に方向づけた事件となつた。

バックストンは、まさにこの「明治二十三年」に、新教渡来に遅れること三十年にして来日した。バックストンとそのスタッフの松江を中心にした山陰伝道は、明治二十四年から三十五年に渡るもので、この「松江バンド」の働きは、まぎれもなく日本の純福音運動の源泉となつた。とは言え、この「純福音運動」は、バックストン来日に先立つこと三十年前に渡来したプロテスタント宣教師たちによってその根がおろされ、バックストンはその純福音運動に油を注いで燃えあがらせたという都田恒太郎氏の見方は、日本キリスト教史上における「松江バンド」の位置づけの上に極めて重要な意義をもつと思う。

というのも、必ずしも日本の教会に一樣に刺激を与えたわけではないにしても、新神学問題が、「純福音信仰を素直に受け入れ、清新なりバイバルの雰囲気に含まれていた」<sup>⑤</sup>それまでの教会の内部に相当の影響を及ぼしていたこの時期に、バックストンは従来と少しも変わらない、オールドな福音信仰をもって強力にその働きを進めていたからである。日本の初期プロテスタント宣教とバックストン宣教とを結びつけるもう一つの理由として、この時まで、「交錯」と「緊張」の関係をもたらししてきた「分派化」と「集中化」の二傾向が、「分派化」にイニシアティブがとられるようになったこの時期にあって、バックストンの宣教が、カトリック教会の propaganda (布教) や教派的プロテスタントミッションと違って、純粹に「プロテスタント宣教」を展開したことであつた。これは、原理的にはあの「公会主義」を打ち出した日本の初期のプロテスタンティズムと軌を一にするものであつた。バックストンを送り出したC・M・

S (英国教会伝道会) は、明治二年「米国監督教会」を援助するために渡来しているものの、バックストンの日本宣教はC・M・S本来の主旨とバックストン家の意向が組み合わされた超教派宣教であった。それは、その宣教が教派を超えて福音を証しするというにとどまらず、その宣教の目的とヴィジョンが、「英国教会」を海外に進出させるのではなく、欧米の教派のどの線にも従わず、すべての日本人クリスチャンを一つの会衆に結合させる日本人教会を指向するところのものであった。<sup>⑧</sup>

かくして、日本キリスト教史上「未曾有の沈滞期」<sup>⑨</sup>にあつて、「松江バンド」の働きは使徒時代の教会の原則にしたがつてリバイバル的栄光を拝した。<sup>⑩</sup>のみならずその流れは、「日本聖公会」をはじめ、既成の教会はもとより、「ホーリネス」や「自由メソジスト」らの福音派諸教会に多大な影響、感化を及ぼすに至った。<sup>⑪</sup>それと共に、さらに注目すべきは、一九〇三年(明治三十六年)、英国のケズィックにおいて、バックストン、ウィルクスらを中心に「日本伝道隊」(Japan Evangelistic Band) が結成されたことである。<sup>⑫</sup>これは、過去十二年間に、松江において、聖書に啓示され、実行に移され、その効果の「実証」されている「松江バンド」を今や「全日本」的に展開しようと試みるもので、「松江バンド」のヴィジョンとプリンシプルを「ゴッソリ」具現したものである。<sup>⑬</sup>かくてこの働きは、一九〇五年、東京から神戸に本部が移されるや、新開地「湊川伝道館」<sup>⑭</sup>を中心にすさまじい救霊戦を展開、年間何百という靈魂が救われ、幾多の教役者を生み出した。加えて、「聖書学舎」の設立、聖会、文書伝道、教役者派遣などによる諸教派への応援の形をとってその働きは進展した。やがて働きは全国的に拡大し、一九二一年(大正十年)、J・B・ソーントンが独立して「日本自立聖書義塾」を丹波柏原に開設、幾多の教職者を養成し、丹波を中心に裏日本一帯に伝道を展開、翌一九二二年(大正十一年)には、柘植、藤村らの「キリスト伝道隊」、通称「活水の群」が起され、全ききよめと神癒とをもって、文字通り火の流れとなって日本全国を席卷。さらに一九二三年(大正十二年)には、

ミス・バーネット、舟喜・佐野らの「中央日本開拓伝道団」が設立され、群馬、栃木、埼玉一円にパイオニア・ミッションを展開。そして一九二四年(大正十三年)、竹田俊造らの「復興教会」が「湊川伝道館」より独立し、神戸市内に働きを拡大した。この間、ウィルクス、竹田らによって導かれてきた「日本伝道隊」は、竹田独立のあと、一九二五年(大正十四年)、あらたに神戸の御影に「聖書学舎」(現関西聖書神学校)を起し、摂理的に諸教派の門戸が閉ざされたこの時期に、カスバルトソン、沢村らを中心に「前進運動」(Forward Movement)を推進、幾多の教会を起し、戦前の「イエス・キリスト教会」から、戦後さらに輪を広げて、小島伊助らを中心に「日本イエス・キリスト教団」が結成されるに至った(昭和二十六年)。かくして、「松江バンド」の働きは、全日本に拡大し、広大な福音主義陣営のすそ野を形成するに至った。

明治二十三年を境に、日本の教会の内外から強烈な攻撃が加えられ、教会の苦渋の続く中で、教會的、社会的、個人的のそれぞれの色合いをもった既成の三バンドに加えて、聖霊による神との豊かな交わりに彩られたもう一つの聖き流れが祖国に加えられたこと、そして、その流れが今日の日本のキリスト教会にいかほどの影響を与えているかを痛感するときに、日本民族が教育勅語をもってキリスト教の第二次挑戦に応答した<sup>⑮</sup>まさにその年、バックストンの来日したことは、不思議な神のあわれみの御手を感じざるをえない。しかししてもはや、この「松江バンド」を見落して日本キリスト教史を見ることはできないであろう。<sup>⑯</sup>

二

バークレイ・フオウエル・バックストン (Barclay Fowell Buxton 1860~1946) の出てきた根源及び生い育った土

壊は、十八、九世紀の巨大な英国エバンジェリカルである。系譜上、その根源は父方のサー・トーマス・フォウエル・バックストンに代表される重厚な低教会福音主義と、母方のエリザベス・フライ女史に代表される神秘的なピュリタンズム「クエーカー主義」である<sup>⑩</sup>。家庭的には父トーマスと母ラケルに小さいを負い、彼に与えた両親の感化はおよそ他の比ではない。一方、C・T・スタッドを含むC・I・M（中国内地伝道会）のケンブリッジ・セブンと彼らを生み出したケンブリッジ基督者学生同盟会との交流や、ウェブ・ペプロー及びエルウィン・オリファントらの奉仕生活、さらにはハンドレー・モールやウェストコットに代表されるケンブリッジの学風、それに、D・L・ムーディやハドソン・テラーらの宣教活動などの彼に与えた影響と感化は測り知れないものがある<sup>⑪</sup>。とは言え、もとより、それらはバックストンをつくった第二義的要素であって、決定的要因ではない<sup>⑫</sup>。

バックストンは確かに「歴史の子」であると共に、何にも勝って「上からの子」であった。彼をつくった決定的要素とは、とりもなおさず、彼の「新生」と「聖潔」の体験である。彼の「新生」が彼の二十三才の時であったとは、我らにとって一面驚きである。それだけに、異教国の我らの新生とその内容を決して異にするものではないにしても、はるかに十分の備えのなされた、確実にして意識的な神の子の経験であった。ゴッドフレイはその『信仰の報酬』において、彼の「新生の日」を躊躇することなく、一八八三年十一月九日、ケンブリッジにおけるムーディの伝道集会の日<sup>⑬</sup>に位置づけている。したがって、バックストンがこの集会を通して、単に、伝道者となる決意を表明したというとらえ方は、バックストンの本質をとらえる意味において重大な欠陥を生じると思う<sup>⑭</sup>。この「新生」の後、彼は「自分の心のきよくないことを感じた。」これが圧倒的な新生の恵みの後の彼の心の状態であった。このことは彼の新生の不十分さを物語るのではなく、否、十分な新生経験であったればこそ、やがて来るべきさらにまされる「ホーリネス」の恵みへの渴望を意味する以外の何ものでもなかったのである。彼の「聖潔」への道を段階的にたどってみる

と、①ウェブ・ペプローとエルウィン・オリファントらの感化、②ウェスレーの言うところのホーリネスへの強い覚醒、③自分の心のきよくないことの実感、④聖書に啓示されているきよめの約束の聖句への信頼、⑤この心の純潔と聖霊のバプテスマこそは、彼の生涯と奉仕の原動力になるとの確信、⑥この大真理を聖書の示すままに学び、見出したところを説教し始める。⑦そして、「ある日」、ヘブル一〇・十九以下より、聖霊は彼自身のメッセージを用いて、彼の心の、その時、そこで潔められたるを確信せしめた<sup>⑮</sup>。この「ある日」は、十一月のムーディのケンブリッジ伝道の終わった時から、その年（一八八三年）の末まで、「引き続き教区に於て働きを続けている間」と見れば間違いないであろう。

バックストンの内に燃える魂への渴望は、この神の提供する福音の最高恩寵をすべてのクリスト者に提供することであった。しかして、神の約束への「不信仰」を厳しく戒めつつ、同時に真理から逸脱する「狂信」を警戒しつつも、大胆に聖なる欲望を起すことをまずすすめる。そして、聖潔の生涯への召しはクリスト者万人に提供されるものであって、聖潔は赦罪と平和とを受けたよりも一層深い経験であること、そして、その準備と供給の全備は、十字架と復活、聖霊の降臨において完全であること、その時期と可能性は、肉体において生きている間において十分可能であり、そのゴールは三位の神との結合とその完全支配であることは、彼の『聖書の聖潔』の基調をなす。しかして、アダムの「絶対的完全」とか「誘惑にかからない完全」とか、「無罪の完全」や「判断に誤りなき完全」、さらには「成長なき完全」に至っては、それらと明確に一線を画する<sup>⑯</sup>。

そこでまず、「聖潔は赦罪と平和とを受けたよりも一層深い経験」とは、聖潔の基礎が認罪、悔い改め、十字架信仰を経て与えられる「義認」と「神との平和」を内容とする「新生」に土台し、かつ「段階的」であることを意味しよう。「段階的」とはもとより平面的にあらず、立体的であって、そもそも究極的には「義認」も「聖化」も「栄化」も

三位一体的福音の恩寵である。それは神の知恵、神の奥義であって、神の賢き賜物、まさに「み救いの賢さ」ではある（「イコリント」・三〇）。すなわち、人間の肉の行為に破産して、ただ功なくして、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされる（ロマ三・二四）という義認の恵みは、その恩寵そのものの中に、すでに聖化の恩寵を包含している。たとえば、ローマ六章では、はやここに至って「罪に死んだわたしたち」（六・二）とさえ言い切っている。これが義認の恵みのライン上の結論であり、同時にこれは、聖書中またとない聖潔の宣言文でもある。従って、義認の恵みを「隠れ箕<sup>ま</sup>」として罪にとどまることは「断じて」許されない。ただ、義認というスタート・ラインに立った者が、それを口実に道徳廃止論に墮さずとも、あまりの感恩の情に、知らず知らずのうちに自らの行為をもって聖化のラインに進もうとするは自然の成り行きである。しかし、この「まじめさ」は、やがて底知れない自己嫌悪に陥り、敗北的キリスト者生活を余儀なくさせられることもまた否定できない。ここに至って、この局面を打開するために、自らの行為から目を放って、あくまでも信仰義認の原理的立場に自らをおきつつ、肉体生活における此岸の「聖化」の完成を「あがないの日」の彼岸のあなたにおいて、霊肉の激しい闘争過程を経てそのゴールに向かうという立場をとるか、「それとも知らないのか」（ロマ六・三）と今一度、千歳の岩なるキリストの十字架を仰ぎ、「キリスト・イエスにあずかるバプテスマ」の奥義に基づいて、「古き人」をキリストの十字架の事実、「信仰によって」磔殺し、その決算上の答えとして「罪に対して死に、キリスト・イエスにあつて生きる」との「恵みの下」の生活に入るといふ立場をとるか、道は二つに一つである。実は「水のバプテスマ」のときに、この「バプテスマの奥義」を体得することが理想であろうが、現実においては、新生の後にこの奥義の何たるかを知るに至るのが通例であろう。②

続いてバックストンは、漸次的聖潔を否定し、この新生と聖潔が転機的な恩寵であって、かつ段階的であることを指摘する。③「罪人は救いを受けられるが、聖霊を受けることはできない。」しかし、「御霊によって生れたものは、はじめて内に住まわしめるために聖霊ご自身を受けることができる。」モールもエペソ三・一六、一七の「キリストに住まわせる」と言うみわざは、IIコリント一三・五の言う、新生、再創造によって神的合一に至っている者に対してなされる転機的なみわざであると言う。そして、この「転機」の背後に神の特別な御霊の力が必要であることを指摘する。④同様に、バックストンも、この「新生」から「聖化」への「転機」を、その約束を示す聖句の時制がアオリスト形であるという釈義学的見地から証明すると共に、この問題に関する「型」（タイプ）、たとえば「約束の地に入ること」、「結婚」、「王の戴冠」などがすべて危機的要素をもっていることを強く指摘する。⑤聖潔の「点」は「線」の始まりであり、的要素と共にはるかに勝って持続的要素をもっていることを強く指摘する。⑥バックストンにおけるこの聖化「点」なくして「線」はありえないが、「線」に行かない「点」はまた無意味である。バックストンにおけるこの聖化の「点と線」のコンビネーションは、本質的なキリストと我らとの union と communion という極めて対神的な人格関係において発展する。

しからば、バックストンにおいて、我らの経験できるところの「全き救い」あるいは「極端まで救う」という神の新創造のみわざとは何か。従来から指摘されているように、この恩寵のみわざは常に二つの面をもつ。たとえば「脱ぐ」「着る」、「毀つ」「建てる」、「捨てる」「得る」、「死ぬ」「甦える」、「降伏する」「占領する」などで、前者は消極面であり、後者は積極面である。そしてこの消極面と積極面は文字通り「相対立する」が、実は後者は前者を前提とする。すなわち、前者は後者の必須条件である。ところが、後者の成就是聖潔の継続過程において、後者が生きて前者を常に前者たらしめる。その意味で前者と後者とは互いに「相協力し直結する」。実は、この「相対立し」「相協力する」という聖潔の消極面と積極面のいっさいのよりどころは、とりもなおさず「十字架と聖霊」である。バックスト

ンにとって聖潔とは「十字架と聖霊」、「血潮と御霊」、「カルバリーとペンテコステ」であって、「十字架によりて」の絶対的消極と「聖霊によりて」の絶対的積極であった。<sup>⑧</sup>それは、イエス・キリストの十字架を通しての聖霊のバプテスマによる内住のキリストの恵みで、それによって、「心と性質との内にある罪から実際に解放され、実行のできる救い」となるのである。そこで、この消極面の徹底こそが積極面を開くことであって、それはみことばと御霊による内心の「探り」から始められ、その光の鋭さ、深さ、徹底さは、深刻に消極すべき「実体」を明らかにする。そして、この「実体」こそが「罪」(ロマ六・七章、七・二〇)、「古き人」(ロマ六・六、エペソ四・二三、コロサイ三・九)、「罪の体」(ロマ六・六、コロサイ二・一一)、「死の体」(ロマ七・二四)、「罪と死との法」(ロマ八・二)、「肉の念」(ロマ八・五―八、Iコリント三・一―四)、「肉」(ロマ八・八、ガラテヤ五・一六―二二)と表現されるものであって、この「一物」が「十字架によりて」磔殺されることが聖潔の「天王山」となる。こうした魂の「取引き」は新生なき魂においては望むべくもないであろう。

しかして、「十字架によりて」の「絶対的消極」は「聖霊によりて」の「絶対的積極」の新局面を開く。そして、前者を後者たらしめたとき、「あらねばならない」前者は、もはや「あつてはならない」ものとなる。竹田俊造の「我キリストと共に十字架につけられたりはきよめではない」はまさに至言である。では何がきよめか。「キリストわがうちにありて生くるなり、これがきよめ」である。これはきよめの積極面、「聖霊によるきよめ」を言いえて余りがある。すなわち、「私が死んだら彼が生きてくださる」という表現は、裏を返せば「彼が生きてくださるゆえに私は生きなくてもすむ」という表現ともなる。ここに「我の死」の意識よりも「彼の臨在」の意識の方がいよいよ鮮やかとなる。「内心の純潔、心の内の思いと動機の医癒」という根本的きよめは「神が私共を助けて、罪に勝たしめてくださる、ということ以上」の恩寵であって、<sup>⑨</sup>内住の御霊によるキリストの内顕現を意味し、ささげた、従った、まかせた、という「我」も、きよめられたという「我」も見失って、「私のいのちは私でなく、キリスト」という証し、フル・オブ・クライスト、生ける主の合一、合体、占領という「到達点」を示している。したがって、この「聖霊によるきよめ」という根本的きよめ (radical holiness) は、肉体をもっている間に罪の根は残るが、信仰によって勝つていくという「圧迫説」(suppression) でも、victorious life でもなく、もちろん、極端な、無造作な「根絶説」(eradication) でもない。御霊により信仰によって、キリストの「死」と「甦り」に結び合わされるといふ「合体説」(identification) である。<sup>⑩</sup>昔、会見の幕屋が外庭と聖所と至聖所とに造られ、その会見の幕屋を神はその栄光をもって満たしきよめたが、今や、神は神的栄光の総算用をもって霊と心と体の全存在、全人格をきよめ給う。バックストンの言う「至聖所的キリスト者」はここに完成する。

### 三

しからば、きよめはもはや理論ではなく生活である。すなわち「神との交わり」である。渡辺善太氏は「松江バンダ」の勝利の源泉をその「聖書的なこと」と、その「教會的なこと」と共にこの「神秘的なこと」、すなわち「神との交わり」にあると言う。<sup>⑪</sup>バックストンにおいてこの交わりの模範は、キリストと「父」とにおけるそれである。たとえば、「ヨハネ伝」において、キリストと父なる神との交わりは、「父われと偕に在す」(ヨハネ一六・三三)という「交わり」の段階から、「我と父は一つ」(ヨハネ一〇・三〇)という「本質的結合」へ進み、さらに「我の天の父に居り、父の我に居給う」(ヨハネ一四・一〇)という「完全所有」までの深さをもっている。<sup>⑫</sup>「神のみ彼の中に生き給うた」という限度までの「神との交わり」を我らの模範とせよが、バックストンの「イミタチオ・クリスチ」の眼目である。

ではバックストンにおいてこの「神のみ彼の中に生き給うた」という限度までの「神との交わり」を實際生活において「現実」たらしめ「持続」せしめる「原理」とは一体何であろうか。

それはまず、モールの言う confidence in self-despair を意味する主への絶対依存である。これが「神との交わり」の根であり、「主の臨在信仰」のバックボーンである。キリストに似るとは、一体どこがどのようにキリストに似るのか。それは「祈りなくしてはやっていけない」というキリストの御姿においてであり、「神が共にいませずば全く手も足も出ぬ程に無能なることの認識」<sup>④</sup>においてである。この「無能なる認識」すなわち、キリストの essential weakness において、我らはキリストに似る。バックストンの旧新約のあらゆる「聖書講義」とその「説教集」及び「小冊子」の全巻に底流する主旋律はこの徹底した confidence in self-despair である。もとより、マーレーも、我らが「キリストの如く」なることをこの一点にしほっている。彼はこのキリストの humiliation をあがないの根底にとらえ、キリストの humiliation は我らの salvation となったが、しかし、彼の与える salvation とは、我らが彼の humiliation になることであると言う。バックストンによれば、サタンの主イエスへの誘惑はキリストを「神の子」として神から「自立」させることであつたが、主イエスの勝利は「人の子」として神に絶対依存することにあつた<sup>⑤</sup>。キリストが「人の子」として「からだを備え」られたのは、「御旨を行うため」(ヘブル一〇・五、九)であつて、我らの「キリストのまねび」もこのところにある。

「わが霊による」との主の「みことりの」の前に、個人的力量も団体的勢力も、すなわち、いっさいの「肉の頼み」を投げ捨て平伏する「真の割礼者」たち(ピリピ三・三)によって、「日本伝道隊」(J・E・B)は創設され、ゼカリヤ四・六はその標語となった。「もしあなたが一緒に行かれないならば、わたしたちをのぼらせないでください」(出エジプト三・一五)との絶体絶命のモーセの「本質的弱さ」があつてこそ、「わが臨在汝と共に行くべし」(同三三・一四)

は輝き、主の伴侶と保護は現実となった。「我らの戦闘力は、第一に我らの無能、第二に主の全能」という笹尾鉄三郎のことは、これらの真理を言いえて余りがある。人間の誉れを「断固」断わり、この世の助けを「断然」退ける厳しさと鋭さの中に、日本におけるJ・E・Bも中国におけるC・I・Mも存在した。しかし、その「信仰の報酬」は近世の宣教活動の分野において「奇跡的」である<sup>⑥</sup>。

然り而して、これは個人的聖潔のプリンシプルであると共に、「教会」のプリンシプルであつた。その政治体制がいずれであれ、「キリストが教会の首」となり「召されたる者」の中に臨在されるといふこのプリンシプルがいかに、西洋のキリスト教の教派的教会を輸入するのではなく、その国の国民によってなる純然たる教会を、聖書及び霊的基準にしたがつて築くという、「純日本的教会」の形成をバックストンもウィルクスも幻を見ていた<sup>⑦</sup>。今日、この線に従つて、教憲・教規が具体化され、設立されるに至つた「日本イエス・キリスト教団」のもつ歴史的意義は大きい<sup>⑧</sup>。

バックストンにおいて、「神のみ彼の中に生き給う」という限度までの「神との交わり」を現実たらしめ持続せしめるもう一つの原理は、神の臨在を不断に現実たらしめるところの「敬虔の修業」である。たとえばバックストンは、コロサイ三章五節以下を註解して、「だから地上の肢体を殺しなさい」を「何だ、私どもはもう死んでおると思つた、と彼らは言うかもしれない。そうです、死んでおるから殺すのです」。(傍点筆者)これが聖書的、福音的な「敬虔の修業」である。キリストと共に割礼され、よみがえつた者は、地にある肢体、肉体の欲を殺しつづける「死の場所」を知っている。コロサイ書二章から三章にかけて連続する「キリストと共に」(二・一三、二〇、三・一、三、四)は、キリスト者の原理的立場である。すなわち、キリストの生、死、復活、昇天、栄光顯現という「キリストの事実」に「共に」と「信仰によって」あざかり、しかして我らが生かされ、殺され、甦り、神のうちに隠れ、やがて栄光のうちに現れるという、過去、現在、未来における我らのキリスト体験が続く<sup>⑨</sup>。この「キリストと共に」のあが

ないの体験、煎じつめれば「磔殺と聖霊」の体験が確實であるときに、地上の肢体を「聖霊によりて」(ロマ八・二三)殺すことができ、肉体の欲を「聖霊によりて」常に「死の場所」に保ち続けることができる。バックストンは、神との交わりを保ち、深めるのにいかに注意深くあったか、憂えしめざる聖霊の臨在に対していかに注意深くあったか、神と人との愛の中にいかに新鮮に生きていたか。実にバックストンをバックストンたらしめた秘訣はここにあった。バックストンはペンテコステの恵みに生きた。それは「常に目の前に主を見た」(使徒二・二五)生涯である。しかし、それは「常に主をわたしの前に置く」(詩一六・八)ことなくしてはありえない。バックストンをしてバックストンたらしめたのは理論にとどまらない、この信仰生活であった。それは、礼拝と祈禱における生ける主との交わりであり、絶えざる主の臨在の輝きであった。内村鑑三をして「人類の華」と叫ばしめ、中田重治をして「見せるきよめ」と言わしめ、竹田俊造をして「きよめはイズムでなくペルソナだ」と直感させたその人格と生涯は、彼の「信仰」への主の「報酬」ではなかったか。「神は今日、我らをいかなる類の人物になし得たもうか。バックストンの生涯にはその答がある」。

以上が、バックストンをバックストンたらしめ、松江バンドを松江バンドたらしめた聖潔の恩寵である。それは、聖書的といったが、聖書の部分的恩寵ではなく、聖書全巻に満ち満ちている約束に基づくものである。この十字架と聖霊を土台とし、最後的には神との交わりに至らしめる聖化の恩寵は、真に福音をして福音たらしめた。実に彼らの超教派性はこの「全幅的福音」(Full Gospel)とそれを「受容すべき教会」とに対する切なる重荷が源となっている。それは日本における宣教の次元を高め、その目的とその方法をよりいっそう純粋化してきた。そしてこの「全幅的福音」は、今後の日本における教会の福音理解とその宣教の目的と方法を本質的に問いかけ続けるであろう。それと

共に、この流れの世に現われた歴史的経緯もさることながら、今、現にこの「神と小羊との御座」から流れる天来の「聖霊の大河」に直接あずかるとき、実はそれこそ松江バンドの流れにあずかることになり、その生命的、本質的「信仰」に対する「報酬」は、今後も続いて与えられるであろう。

注

- ① 大内三郎、『日本キリスト教史』(日本基督教団出版局・一九七〇年)三三五―六頁。
  - ② 同書、二二六―三四〇頁。
  - ③ 小島伊助、「松江バンド―その歴史と信仰―」『塩屋講演』(自費出版・一九七一年)八一―一〇頁。
  - ④ 都田恒太郎、『バックストンとその弟子たち』(バックストン記念聖会・一九六八年)七頁。
  - ⑤ 柳田友信、『日本基督教史』(聖書図書刊行会・一九五九年)五〇頁。
  - ⑥ 大内、『前掲書』一九二―二二九頁。
  - ⑦ 石原謙、『日本キリスト教史論』(新教出版社・一九六七年)六一―七頁。
  - ⑧ Church Missionary Society, 英国教会低教会を母体とする「ロンドン宣教会」同様「超教派宣教会」。
- バックストンは伝道会所属の宣教師ではあったが、伝道費はバックストン家が負担。バックストンとそのスタッフに与えた「任命書」には純粋なプロテスタントミッションの精神がにじみ出ている。「B・G・バックストン、『信仰の報酬』(バックストン記念聖交会・一九五四年)六八、九頁。」C・M・Sとバックストンとの間には、彼らの働きが英国においてのように英国教会を回心者たちの上に押しつけることでなく、その国に最も適したように教会を建設することと、バックストンが他の教派において自由で自由に語ることについて、双方の間で確約されていた。「同書、七五頁。」したがって、日本においてバックストンが他の教派において自由で自由に語ることや、他派(この場合、長老派のウインド氏)の宣教師を松江に同行することや、「聖潔」のメッセージなどについて、現地監督からクレームがつけられたとき、彼は英国のC・M・Sのあり方と現地の日本聖公会のあり方との間に基本的な相違のある



ことを感じとっている。バックストンにおいてこれらは大きな問題であったが、結局生涯彼の超教派的立場をくずさず、同時に聖公会教職として、その奉仕を全うしたことは注目に価する。

⑨ 同書、六〇頁。

⑩ 柳田、『前掲書』四六頁。

⑪ バックストンの松江伝道の開始は、一八九一年四月。松江にあるわずかな信徒と教会内で祈禱会を開き、劇場での伝道会から始まる。最初の洗礼式は翌九二年の初め。ついで同年、六十名収容の会堂を建設。赤山住宅を完成。ここで献身者たちの修養を行う。九三年には、ハドソン・テーラーを招き神戸で日本の各教派の宣教師たちと英語のわかる日本人を招いて「修養会」（多分日本で最初の修養会）を開く。同年の終わりまでに松江、米子地方に七つの教会設立、七十人の信徒の群ができ、できた群の責任を日本人に負わせる使徒時代の初代教会方式で急速に発展。九四年、休暇で英国に帰国。ケズイックの御用を終え再び来日。九五年、日本におけるアライアンスの働きの指導者になってほしいとのシン普森からの要請を熟慮の後辞退。九七年十月には、パジェット・ウィルクス氏夫妻来日。九九年十二月、中国で義和団の乱おこり多くの宣教師とその家族が殺され、C・I・Mだけでも八十名殺される。一九〇〇年秋。上海に中国各地から集まれる五百名からの宣教師たちの二週間にわたる修養会に講師として御用。C・I・Mとバックストンとに「ケンブリッジ・セブン」との関係から靈交互助の関係があり。同年、彼と共に働く宣教師は十一名。日本人教職も、同志社から松江に走った竹田、藤本、三谷、堀内、小さき群から赤山塾に飛びこんだ土肥、御牧、河辺、笹尾、秋山ら、それにその土地で救われた永野、都田、由木、木村、奥田、米田ら。さらに中田も時折来訪。年間平均受洗者四十名。一九〇〇年までに広瀬の教会だけでも受洗会員三一六名。春、夏に松江にて特別聖会。西日本福音ルーテル教会機関紙『主の枝』（一九七六年六月）の、宇山正利氏の論文「バックストンが日本の教会形成に及ぼした影響」には、バックストンの「松江における教会形成」の本質的なあり方が紹介されている。

⑫ 都田氏の『バックストンとその弟子たち』によると、日本人教役者の松江からの巣立ちには、永野、藤本、土肥（後独立伝道）らは聖公会。中田、笹尾らはやがてホーリネス教会や柏木の聖書学院を設立。河辺は日本自由メソジスト教会を結成。日本伝道隊には、竹田、三谷、堀内、御牧ら。

⑬ A. Paget Wilkes (一八三七一—一九三四)。彼の働きはJ・E・B結成後特に著しい。由木康氏によれば、オックスフォード大学編纂の『キリスト教事典』には、日本のキリスト教に最も影響を及ぼした人物として、フランシスコ・ザビエル、賀川豊彦と共にウィルクスの名があげられている。

「日本伝道隊」は最初重荷をかついて Prayer Circle に各々自分の家帯を以てして Rev. and Mrs. Herbert Wood, Hubert Verner, W.H.R. Tredineck, Rev. Tremor and Miss Lingley, Albert Head (Chairman of Keswick), J.G. Govan (founder of the Faith Mission), Miss Gurney (of the International Christian Police Association) W. Thomas Hogben (of the One by One Band) and others, B. Godfrey Baxton, *The Reward of Faith in the life of Barclay Forewell Baxton* 1860~1946, p. 149. 日本人同労者については、竹田、御牧、三谷、樋口その他もある。J・E・Bの *Constitution and Policy* は一九五〇年改訂) I. NAME 省略 II. OBJECT: The evangelization of the Japanese through the preaching of a full salvation. III. SPHERE 省略 IV. TEACHING 前文より IIの項を省略 Third: A full salvation and separation unto God, and a true union with Him through faith in our Lord and Savior Jesus Christ. To this end it emphasizes Entire Sanctification as a work of grace in the heart of the believer (1 Thess. v, 23; Romans vi, 6, 10—13) This embraces heart cleansing (Acts xv, 9; John i, 9), the fullness of the Holy Spirit (Eph. v, 18), the indwelling of Christ in the heart (Eph. iii, 17) and the perfecting of holiness in the fear of God (2 Cor. vii, 1). Fourth: The unity of all true believers in Christ. 以下VからVIIまで省略

⑭ B・G・バックストン、『前掲書』一七六—一七頁。小島、「前掲書」八八頁。

⑮ E・W・ミズデン、『歓楽街の五十年』（日本伝道隊・一九六五年）にその働きが歴史的に詳しく述べられている。

⑯ 小島伊助、「聖霊の大河」『福音』（日本イエス・キリスト教団福音部）二七七—二九一号。及び小島、「前掲書」。

⑰ E.W. Gosden, *Take Fire! James Cuthbertson of Japan*, (J.E.B. 1960) pp. 43~49.

⑱ 柳田、『前掲書』七頁。

⑲ 都田、『前掲書』一四—三四頁。

⑳ B・G・バックストン、『前掲書』二二—二七頁。

㉑ 同書、三四—四一頁。都田、『前掲書』四五—五八頁。

㉒ B・G・バックストン、『前掲書』二七頁。

㉓ 同書、四〇頁。

- ②4 都田、『前掲書』五七、六一頁。宇山、「前掲書」一一頁。「B・F・バックストン」『キリスト教大事典』（教文館・一九六三年）八三〇頁。
- ②5 B・G・バックストン、『前掲書』四〇―四二頁。
- ②6 B・F・バックストン、「聖書の聖潔」『燃える柴』（竹田俊造主筆・一九三〇年創刊）第六号、第八号
- ②7 小島伊助、『義認・聖化・栄化』（いのちのことば社・一九六九年）四九―五八頁。
- ②8 M・A・バーネット、『ロマ書講解』（福音伝道教団出版部・一九六一年）八三頁。
- ②9 B・F・バックストン『ヨハネ伝講義』（バックストン記念霊交会・一九九九年）二七〇頁。『使徒行伝講義』（バックストン記念霊交会・一九〇〇年）二二二頁。B・G・バックストン、『前掲書』二〇二―二〇三頁。「聖書の聖潔」『燃える柴』第六号。
- ③0 H・C・G・モール、『至聖所の生活』（いのちのことば社・一九六一年）七四―八一頁。
- ③1 B・G・バックストン、『前掲書』二一六―二一七頁。
- ③2 <ブル書七章二五節、eis to rourais、これを「極端まで」に用いる。
- ③3 B・F・バックストン、『基督の形成るまで』（バックストン記念霊交会・一九五三年）六四頁。
- ③4 H・E・ジェソップ、『聖化論』（日本ウエスレー出版協会・一九七五年）二六―三二頁。
- ③5 B・F・バックストン、『聖書の聖潔』
- ③6 小島、『前掲書』一〇二頁。
- ③7 B.F. Buxton, *Heavenly Places*, (London: Japan Evangelistic Band) p. 5
- ③8 『バックストンの思ひ出』（バックストン記念霊交会）一九六四年、第五号。
- ③9 B・F・バックストン、『神と偕なる行歩』（バックストン記念霊交会・一九五五年）四―一〇頁。
- ④0 Handley, C.G. Moule, *Philippian Studies*, (London: Pickering & Inglis) p. 162
- ④1 B・F・バックストン、『神と偕なる行歩』四頁。
- ④2 アンドリュウ・マーレー、『謙遜』（いのちのことば社・一九六七年）一〇頁。
- ④3 B・F・バックストン、『赤山講話』（バックストン記念霊交会・一九五四年）一―二頁。
- ④4 B・F・バックストン、『使徒行伝講義』二二三、三三四頁。

- ④5 「中国内地伝道会」の根本原則や伝道方針（石原、『前掲書』九一―九四頁参照）と「日本伝道隊」のそれと比較するとき、両者はほとんど同一の原則・方針に立っている。
- ④6 B・G・バックストン、『前掲書』六〇頁。E・W・ゴズデン、『燃える心の使徒、パゼット・ウィルクス』（いのちのことば社・一九七一年）一六八―一六九頁。
- ④7 B・F・バックストン、『神の奥義なる基督』（バックストン記念霊交会・一九四九年）五六頁。
- ④8 小島伊助、『我なり恐るな』（いのちのことば社・一九六六年）五七―七六頁。
- ④9 B・G・バックストン、『前掲書』九頁。
- ⑤0 小島伊助、『聖顔の輝き』（いのちのことば社・一九七五年）一一〇―一一三頁。

（関西聖書神学校学監・教務主任）